

日本がトイレ大国になれたのはどうして？

大阪大学人間科学研究科

文化社会学 D2

Marta Szczygiel

はじめに

「お・も・て・な・し」。2013年に滝沢クリステルさんが2020年夏のオリンピック開催地を決めるIOC=国際オリンピック委員会の総会で発表に使った言葉が国内外で日本のおもてなし文化に目を向かせた。そして、そのおもてなし文化が日本トイレにまで浸透している。

内閣府の有識者会議「暮らしの質」向上検討会は2015年5月25日に、きれいで便利な最先端トイレの全世界への普及を目指すべきだとする提言をまとめた。「ジャパン・トイレ・チャレンジ」と銘打たれた政策の中では次のように書いてある。

2020年東京オリンピック・パラリンピックを契機として、「おもてなし」の観点から訪日外国人向けに日本の高機能トイレの使い方やピクトグラムの解説を行い、日本の高機能トイレの快適さ・清潔さを体感してもらうことで、魅力ある日本のトイレの発信とその普及・拡大に繋げていく。¹

現在、その提言を受けた女性活躍担当相・有村治子大臣が、アベノミクス方針のひとつである「すべての女性が輝く社会」という政策の下で日本トイレの改善に取り組んでいる。

また、ANAが2012年2月に海外から興味を引き起こす目的に、「Is Japan Cool?」というPRサイトを公開した。サイトでは日本のカッコいいと思われるところのランキングが掲載されている。各ユーザーが9カテゴリーに分けられる項目に対し、「Cool」か「Not so cool」と評価できる。そして、Discovery編では「おもてなし」に続いて2位になったのはなんと「ハイテクトイレ」。

このように日本トイレが確かに注目されている。今まで日本と言えば、寿司、侍や空手が思い浮かんでいたが、これから日本の象徴がトイレへと変わっていくかもしれない。しかし、形は違うだろうが、トイレ自体はどの先進国ではなじみのあるものである。にもかかわらず、いわばトイレ大国になったのが日本。それはどうしてだろうか？本論文ではその理由は排泄に対する意識にあると主張する。欧米と比較しながら宗教観、自然観と嫌悪感、長期尿尿の使用、そして身体の統制文化を分析していく。最後に、今まで行ったインタビューのまとめ、そして今後の課題を述べる。

¹ 内閣官房、「暮らしの質」向上検討会 提言、2015年5月：16.

1. 日本と欧米との認識の違い

トイレで行っている行為とは何だろう？排泄。排泄は呼吸や摂食並びに、重要な身体機能にもかかわらず、後者と比べればやはり恥ずかしいと思われる傾向はあり、さらに言うと、少なくとも欧米ではタブーになっている。それに対し、日本はトイレ大国とされるだけでなく、排泄行為自体がトイレ空間を超え日常生活にまで浸透していると言えよう。例えば、糞の形をしたストラップやキーホルダー・ろうそく・チョコレートなどが普通に買える。テレビでは糞がメインキャラクターになる『うんこさん』というアニメはもちろん、芸能人やアイドルが排泄の話しても珍しくない。また、日本人は排泄に関する話を割りとオープンにする気がする。このような意識の違いは日本がトイレ大国になれたことの大前提だと思う。なぜ排泄に関する認識の違いが生じたかを探ることが、「日本がトイレ大国になったのはどうして」という質問に答えることに繋がるとする。

2. 宗教観 - 欧米との比較 -

まず、宗教観に触れなければならない。欧米で主要なキリスト教によれば心身二元論、つまり存在の本質である心とその本質をつかさどる身体はそれぞれ独立した実体だとする。そのため、未だにキリスト教圏の国では身体は心より劣っているという観点が一般的であり、身体に関することは汚れており、表に出すべきではないという傾向がある。それに対し、日本の独自宗教である神道や仏教には身体の劣等性は一切見られない。神道と仏教は心身一元論、つまり心と身体が同一であり、双方で存在の本質を成り立たせているという考え方を持つ。

また、キリスト教の中世宗教思想において排泄の話は数多く存在していると注目したい。その理由は、多神教徒をキリスト教へと改宗する過程では彼らに嫌悪感を引き起こす目的で、排泄は非キリスト教的な習慣や英雄と結びつけられた。その後、キリスト教では上半身は清潔さ、天国と神様に結び付けているのに対し、下半身は汚物、地獄と悪魔を連想させるようになった。Bayless が述べるように、排泄は罪のただの象徴ではなく、罪そのものである。それをよく描くのは、プロテスタント神学者のフィリップ・メランヒトン（1497-1560）の聖ベルナルについて語りである。

聖ベルナルが便所で聖歌で祝っていたときに悪魔が現れ、「なぜ便所で聖歌で祈っているか」と彼を叱った。すると、聖ベルナルは「私の口から出るすべてを神様にささげる；しかし、私のお腹の下から出るすべてをあなたに食べさせてやる！」と答えた。²

² Bayless: 5.

その反面、日本の独自宗教の神道の基になっている日本書紀に排泄を酷評するところは見当たらない。増して、排泄物から神が生まれてくる。

この火の神【ヒノカグツチノカミ】をお生みになったために、イザナミ下腹を焼かれて痛み臥せってしまわれた。この時、嘔吐したものから出現した神の名は鉾山の神のカナヤマビコノカミとカナヤマビメノカミ。次に大便から出現した神の名は土器の材料となる粘土の神のハニヤスビコノカミとハニヤスビメノカミ。³

Mary Douglas は汚穢と禁忌は社会を維持するために生まれる構造だとみなしている。“穢れ”というのは物理的に汚れているかどうかは関係ない。私たちが生活している体系が、私たちの汚穢と禁忌の意識を作り出す。そのため、様々な社会で受け入れられる、もしくは否定されるものは違うわけである。

3. 自然観と嫌悪感 - 欧米との比較 -

日本でみられる自然観はこの世の全てのものに神が宿るとする神道と関連し、日本人の自然への尊敬の原因になる。さらに、日本が昔から天災がよく起きる国のため、日本人は欧米人のように自然を支配するのではなく、自然と共存するとよく言われている。

最近よく注目される Disgust studies の Rozin et al.の主流仮説によれば、人間の嫌悪感を次のカテゴリーに分けることができる。

1. Core disgust—根本な嫌悪である。病気にならないように、病原体のあるものを自然に嫌わせる役割を果たしている。そのため、生き物は排泄、死体、腐った食べ物などを嫌う。Core disgust 以外の嫌悪感は進化したものだと考えられる。
2. Animal-reminder disgust—死に対する恐怖から生まれる。人間も他の動物と同じくいつか死ぬことを忘れさせてくれる。そのため、人間は性行為に関することや傷を嫌う。Core disgust と嫌悪感を引き起こす主な原因になる。
3. Interpersonal disgust—危険のため、他人とかかわることを嫌わせる嫌悪感。そのため、知らない人に触られることを嫌う。
4. Moral disgust—社会秩序を守る役割。そのため、現代社会では兄弟結婚は許されない。

このように、Rozin et al.は嫌悪感を引き起こす原因のひとつとして人間の動物的な部分に対する否定を取り上げている。日本でみられる自然観に基づいて人間は自然の一部であり、動物との位置にはそこまでの差はないとされる。したがって、欧米と日本で動物の特徴だと思われる排泄に対する嫌悪感を比較すると、欧米でみられる嫌悪感のほうが強いと仮説を立てられるであろう。

³ 武光: 28.

4. 長期肥料の使用

日本は長い間尿尿の利用に頼っていたが、それが排泄の捉え方に大きな影響を与えたと考えられる。鎌倉時代(1185-1333)から肥料として人間の排泄物が用いられており、江戸時代には尿尿が価値の高い商品になり、販売が行われていた。今は想像しにくいだろうが、貧乏な農家が尿尿が買えなかったため、盗難事件もあったようである。

尿尿の利用により、日本の町は比較的きれいだっただようである。近世に初めて来日した外国人の日記などを見ると次のようなコメントが書いてある。

- ヨーロッパでは便所は誰にも見られないように家の後ろに隠してあるが、日本の便所は堂々と前にある。(Luis Frois, arrived to Japan in 1563)
- 日本の便所は非常に清潔で、よく掃除されて、何も臭くない。(Joao Ridrigues 1577)
- 【日本の】便所は藁箆に切った目立たない穴のある少しも汚れていない部屋の中にある。人はもみ殻でいっぱいになるポットに排泄する。排泄物は次の日に運び去られる。(Engelbert Kaempfer 1683)⁴

当時のヨーロッパの状態を調べると、上記のコメントの理由をよくわかる。一般的に汚物穴に用を足し、そのまま放置していたようである。また、日本でよく指摘されるように、窓から排泄物をそのまま捨てられることもあった。イギリスでは最初の水洗式トイレができた後、排泄物はそのまま川に流され、テムズ川が大変汚れており、そしてロンドン住民などが汚物をそのまま飲んでいた。そのため、水洗式トイレ発明後、コレラをはじめ感染症が大流行していた。がちなみに、1600年代、フランスのパリでハイヒールが流行り始めたのは、パリは下水の設備が無く、ゴミや汚物を路上に捨ててあって、汚物を踏む面積を少なくするためなのである。

しかし、明治になると、鎖国終焉を機に外国人観光客が日本に来るようになる。19世紀のヨーロッパでは水洗トイレが一般的になり、清潔さの基準がだいぶ変わってきたことにより、観光客の印象が前とはかなり異なっていた。

- 臭い、家屋の非衛生的、そして欠陥のある設備。(Isabella Bird, 1878)

⁴ Campbell: 103-4; 私訳.

- 【汲み取り人について】最初は、この状況は不明瞭で、恥ずかしかった。(Frank Lloyd Wright, 1905)
- 「テリーの日本帝国案内」では何か所に衛生設備が臭いという愚痴がある。また、便所について「忌まわしくて、チフスを思わせる」と書いてある。(Terry T. Philip 1912)⁵

Norbert Elias は西洋の文明化の過程を分析しながら、行儀作法、感情的・肉体的表現、食事のマナーの諸側面はいかに社会構造と関係があるかを立証した。彼によれば、上流階級の間で規範化された上品な行動が文明化の過程の中で社会全体のいわゆる礼儀になっていく。そのようなことにより、排泄の明示は社会から消えていく。礼儀は同じ社会の中で上から下へという動きが追跡できる。しかし、日本の場合はこのような動きは見られず、開国とともに日本ではなじみのない海外の礼儀が押し付けられた。つまり、礼儀は外から内へと規範化された。

例に立小便問題を上げよう。日本を訪れた外国人から立小便への不満・苦情がたくさんあり、明治4年に政府が立小便をする人が100文の立小便罰金を払わなければならないという布告を出し、翌年の明治5年に立小便や無蓋肥桶による運搬を禁止する違式註違条例(現在の軽犯罪法に当たるもの)も布達した。また、立小便をする人についてのニュースは新聞で報道され、かなり注目を集めていたのだろう。

このように明治以降多少排泄に対する抵抗感が出始めていたにしても、尿尿が昭和まで農業に用いられていた。しかし戦後、占領軍は衛生上、人糞肥料を問題視して日本産の野菜は食べなかった。野菜を賄うためにアメリカ占領軍専用の野菜を栽培する水耕農園が作られ、占領軍が日本に「近代化」という意味で尿尿の利用停止を促した。そのため1950年代に化学肥料が主要な肥料となったり、下水道の工事が進んだりした。そして水洗式トイレが普及しはじめたのは1959年以降で、その歴史はまだかなり浅い。

現在はトイレへ行って用を足したら、水を流すだけで済むことにより人々が排泄物に接しなくなってきた、それを嫌がるようになったと言える。しかし、日本では排泄物の再利用のため長い間下水道がなく、日本人は便所で糞を溜めて、汲み取り業者に頼っていた。毎日排泄物を扱っていたことから日本人の中では排泄に対する抵抗感が強くならなかったと考えられる。

5. 身体の統制文化 (Health regime)

最後に日本人の排泄のとらえ方の要因として身体の統制文化を取り上げたい。

⁵ Campbell: 106-7; 私訳.

日本で初めてコレラが発生したのは、1822年のことだが、その時は九州から始まって東海道の及び、西国を中心に流行した。再びコレラが日本に上陸したのは1858年であり、日本全土に広まった。そして1862年には、残留していたコレラ菌により3回目の大流行が発生した。この流行の対策として厄払いがされていたが、当然効果はなかった。コレラの大流行によって日本人が自分の病気に対する無力に気づいたであろう。

開国とともに、欧米列強に対する抵抗感により文明化の必要性が現れた。1868年に発表された明治政府の基本方針である五箇条の御誓文の5つ目の条文は下記の通りである。

(現代表記) 智識を世界に求め、大いに皇基を振起すべし。

1871-1873の間、岩倉使節団が日本からアメリカ合衆国、ヨーロッパ諸国に派遣され、医療の知識を取得することがこの使節団の大きな目的のひとつであった。団員の長與専齋がドイツの「Gesundheitspflege」という概念を知り、「衛生」として日本に導入した。

ヨーロッパでは、産業革命により生まれた下層階級の貧困さと病気を終わらせるように、人道的な理由で衛生の向上が重視されていたと考えられる。イギリス、フランスとドイツでは、衛生は近代国家の国民の当たり前の権利という考えは一般的であったが、日本では衛生は植民地化の不可欠な条件だとみなされていた。すなわち、帝国主義、そして軍国主義の日本にとって衛生はとても大事になってきた。国体のイデオロギー、つまり日本国民は天皇を中心とした一つの実体を利用し、自分が健康でなければ、日本全体が健康でないということが信じさせており、不健康であることは国に対する攻撃となった。このように衛生管理を行うことが国民の責任だとされていた。1874年に内務省で衛生局ができ、政府は国民の健康状態を精査していた。夏目漱石がその政府の健康状態の管理について次の通り書いている。

国家のために飯を食わせられたり、国家のために顔を洗わせられたり、また国家のために便所に行かせられたりしては大変である。⁶

そして、身体の統制について、Michel Foucault は次のように書く。

社会による個人の管理は意識やイデオロギーによっておこなわれるだけでなく、身体の内側で、身体とともに行われるものでもあります。⁷

私たちは身体の不調はよくないということを身に着け、バランスの取れた食事、適度な運

⁶ 夏目漱石、『私の個人主義』。

⁷ Foucault: 280.

動、定期的なお通じに心掛けている。Foucault が言う通り、そのような気遣いにより、身体をコントロールしているのは私たち自身であり、つまり権力が私たちの内に浸透している。このプロセスは日本の独自なものではなく、どこでも見られるものであるが、日本では健康でなければならぬ傾向が特に強いように感じる。

排泄は身体のパロメーターと言われている。親は子供の便を見、色や形に異常がないかを確認する。その習慣はほかの国でもみられますが、日本でみられる大便日記やトイレについて学ぶイベントは世界的に珍しいだろう。また、下痢や便秘は身体の不調であり、日本ではそれを治す薬の CM の数が特に多いかもしれない。便に気を遣うことにより、それに関するもの、そして便自体は日常的なものに過ぎなくなる。

6. インタビューのまとめと今後の課題

現在、私の研究はインタビュー段階であるが、日本人の排泄に対する意識においてある傾向が見られる。抵抗感のないカテゴリーとして次が挙げられる。

- 医療－排泄の不調は単なる病気であり、風邪と比較しても、あまり差がないという。そのため、便秘、下痢、大腸カメラの話なら恥ずかしくないと感じる傾向が強い。
- 教育－30代までの女性はトイレトレーニングの目的で話をすることは問題ないという。しかし、女性でも年齢が上がれば上がるほど抵抗感が出てくるというよりも、必要性を感じられなくなる傾向がある。
- 笑い－特に男性、は笑いをとるためのなら、抵抗感がないという。女性については、ある年になると、興味を示さないほうが良いと思われることが多い。
- 可愛い－リアルなものは抵抗があるが、アニメっぽいものに対して抵抗があまり出ないという。しかし、年配の人は可愛くされても排泄に関するものをあまり受け入れられない。

また、同性の間なら排泄の話などは大丈夫だが、異性の前だとそういうのを控えめにしなければならないと感じることがある。

今後の課題として、年齢による排泄に対する意識の変化を分析していきたい。その理由としてウォシュレットの誕生、特にウォシュレットのプロモーション、東京オリンピック(1964、2020)、そしてトイレトレーニングの常用性を詳しく見ていこうと思う。また、今のところでは仮説に過ぎないが、日本は戦争で負け、ましてそこまで衛生とトイレを重要していたのに、アメリカ軍にトイレを見下され、大変自尊心を傷つけられたのだろう。それに Warwick Anderson がフィリピンでの 1898-1946 のアメリカ占領を「Excremental Colonialism」と名付け、アメリカ人にとって衛生とトイレ習慣がいかに大事だったか、どのように自分の基準を押し付けていたかを紹介する。アメリカ軍は日本人に対し同じような態度をとっていた可能性が高い。そのようなことから日本が積極的にトイレの改善に力を入れるようになったと言えるかもしれない。

おわりに

本論文では排泄に対する意識を理由に日本がトイレ大国になったと推論した。

まず、宗教の観点では、日本の主流な宗教である神道と仏教で心身一元論という考えがみられ、キリスト教と違い身体の劣等生が一切に見られない。それに、キリスト教に焦点を当て、排泄が嫌悪感を引き起こすため、多神教徒をキリスト教へと改宗する目的に使っていたことを説明した。それに対し、日本書紀において排泄は嫌悪感を引き起こすどころか、神が生まれてくるものとして描かれている。Douglas が述べるように、穢れは人間が生活している社会により作られ、まさに見る人の目の中にあると言える。

次に Rozin et al.の嫌悪感の仮説と日本でみられる自然観を結び付けた。日本人の自然観に基づいて人間は自然の一部であり、自分の動物的などころをありのまま受け入れる傾向がある。人間は死への恐怖のため、自分も動物であることを忘れさせる Animal-reminder disgust という嫌悪を感じられるようになった。日本では人間と動物の差はそこまで存在しないことから、欧米と比べると動物の特徴だと思われる排泄に対する嫌悪感が弱いと仮説を立てた。

また、日本では尿尿が昭和まで農業に用いられており、毎日排泄物を扱っていたことから日本人の中では排泄に対する抵抗感が強くならなかったと考えられる。Elias の仮説によれば、西洋の文明化の過程の中で上流階級の間で規範化された上品な行動が社会全体の礼儀になっていき、排泄の明示が社会から消えていく。しかし、その仮説を日本に適用すると、同じ社会の中で上から下へという動きが追跡できず、その代わりに海外による礼儀が押し付けられ、つまり、海外から日本国内へと規範化がみられる。

最後に、身体の統制文化を取り上げた。開国とともに、欧米列強に対する抵抗感により文明化の必要性が現れ、衛生が不可欠な条件だとみなされていた。国体イデオロギーを利用し、衛生管理を行うことが国民の責任となっていた。Foucault によれば、権力はイデオロギーにより行われるだけでなく、身体とともに行われるものでもある。帝国主義、軍国主義において生まれた身体の統制文化はまさにそうである。そして、その文化は今でも続いていると指摘した。

以上、このような理由により日本人の排泄に対する意識が形成されなければ、日本がトイレ大国になれなかったと考えられる。

参考文献

- ANA、「Is Japan Cool?」 HP、アクセス：2015年8月28日。〈<https://www.ana-cooljapan.com/>〉
- Bayless, Martha, *Sin and Filth in Medieval Culture: The Devil in the Latrine*, Routledge, 2011.
- Burns, Susan L., "Constructing the National Body: Public Health and the Nation in Meiji Japan." In *Nation Work: Asian Elites and National Identities*. Edited by Timothy Brook and André Schmid, 17–50, University of Michigan Press, 2000.
- Campbell, Gavin James, "Toilets Tell Truth about People: 150 Years of Plumbing for Real Japan" In *The Paradox of Authenticity in a Globalized World*, Edited by Russell Cobb, pp. 103-121, 2014.

- Douglas, Mary, "Purity and Danger: An Analysis of Concepts of Pollution and Taboo", Psychology Press, 2003.
- Elias, Norbert, "The Civilizing Process: Sociogenetic and Psychogenetic Investigations Revised Edition", Blackwell Publishing, 2000.
- Foucault, Michel (原著)、小林康夫、松浦寿輝、石田英敬 (編集)、『ミッシェル・フーコー思考集成 VI : セクシュアリテ／真理』、筑摩書房、2000.
- Fruhstuck, Sabine, "Colonizing Sex: Sexology and Social Control in Modern Japan", University of California Press, 2003.
- Halliday, Stephen, "The Great Stink of London: Sir Joseph Bazalgette and the Cleansing of the Victorian Capital", Sutton, 1997.
- Hanley, Susan B., "Urban Sanitation in Preindustrial Japan, in: *The Journal of Interdisciplinary History*, Vol. 18, No. 1 (Summer 1987), pp. 1-26.
- Howell, David L, "Fecal Matters: Prolegomenon to a History of Shit in Japan." In *Japan at Nature's Edge: The Environmental Context of a Global Power*, Edited by Ian J. Miller, Julia Adney Thomas, and Brett L. Walker, University of Hawai'i Press, 2013.
- Larrington, Carolyne, "Diet, Defecation and the Devil: Disgust and the Pagan Past" in: *Medieval Obscenities*, Edited by Nicola Macdonald, D. S. Brewer, 138-55, 2014.
- Lee JC, "Hygienic governance and military hygiene in the making of imperial Japan, 1868-1912", In *Historia Scientiarum* Vol. 18(1), 1-23, 2008.
- Rozin, P., Haidt, J., & McCauley, C. R., "Disgust". In M. Lewis, J. M. Haviland-Jones & L. F. Barrett (Eds.), *Handbook of emotions, 3rd ed.* (pp. 757-776), Guilford Press, 2008.
- Sugiyama Lebra, Takie, "The Japanese Self In Cultural Logic", University of Hawaii Press, 2004.
- Warwick Anderson, "Colonial Pathologies: American Tropical Medicine, Race, and Hygiene in the Philippines", Duke University Press, 2006.
- 夏目漱石、『私の個人主義』、1914. In: インターネットの図書館、アクセス：2015年8月28日.
<http://www.aozora.gr.jp/cards/000148/files/772_33100.html>
- 大田区立郷土博物館 (編集)、『トイレの考古学』、東京美術、1997.
- 内閣官房、「暮らしの質」向上検討会 提言、2015年5月.
- 武光誠、歴史書「古事記」全訳、東京堂出版、2012.